

ご挨拶

父 川崎優 献花式にて

川崎 雅司

川崎 雅哉



本日、多くの皆様にご参列いただき、和やかに献花式を執り行うことができましたことを大変ありがたく、幸せに思います。父、川崎優が94歳の天寿を全うできましたこと、そして最期まで好奇心を持ち続け、少年の心のまま、多くの作品を残し、幸せな音楽人生を歩むことができたのはひとえに皆様からの暖かいお心添えのおかげと、心より感謝いたしております。

若い頃の父はエンジニアを目指すほどのいわゆる理系で、実際 90 歳近くまで自分でコンピュータを操作し、CD製作やラベル印刷、楽譜の製本や発送などを自分で行っていました。ただ、自分がわからないことを皆様にお尋ねし、無理矢理お願いするのも得意であったようで、多くの方々に長電話でご迷惑をおかけしたことを申し訳なく思います。父からの依頼を断りたくても断れなかったお弟子さんもうらっしゃったことでしょう。良い意味での「人たらし」であったのかもしれませんが。おつきあいいただいた皆様に対しては感謝の気持ちしかありません。

新しい物が好きで、昭和30年代、ソニーが大衆向けに販売を始めた初期の頃の録音機をいち早く購入し、楽しそうに仕事に活用したり、作曲で何かの賞をいただくとそのお金で外国製のソファを購入したり、最初買った車がそもそもルノー、カッコ良くてスマートで、自慢の父でした。当時の仕事で強く我々の印象に残っているのが、NHKのラジオ第二放送の教育番組、おそらく15分か20分くらいの社会科の番組だとは思いますが、その伴奏の音楽を毎週担当させていただいたことです。週の初めにまずNHKのプロデューサーさんから電話がかかってきます。まるでそば屋の注文のように「悲しい場面を15秒」「ブリッジ（場面つなぎの音楽）を3秒」「場面の転換5秒」など

と依頼を受け、その後2－3日で曲を仕上げ、スコアを父自ら車を運転して藤沢の写譜屋さんに届けて大急ぎでパート譜を作成してもらい、譜面が出来上がると今度はNHKのスタジオで声優さんたちと生のオーケストラとで録音です。時間に追われるこの仕事は何年も続けました。今ならアプリを使って中学生でもできるような作業が、当時は本当に大仕事だったのです。

広島育ちで海が大好きだった父は昭和31年に茅ヶ崎に居を構えました。当時の茅ヶ崎は「チガサキ、蚊（か）がさき、ハエがさき」と揶揄されるような桃林しかない田舎でしたが、水泳が得意だった父はよくお弟子さんたちと海遊びを楽しんだり、私たちを自転車の後ろに乗せて江ノ島までサイクリングしたり、江ノ島で釣った魚を家に持ち帰ってしばらく水槽で飼育したり、また友人と花水川に投網に行き鮎を獲ったり、当時の湘南の自然を楽しんでいました。

昭和41年12月8日、父がアメリカ留学に旅立った日のことはよく覚えています。午前10時発の飛行機だったので早朝自宅にハイヤーを呼び、大きなトランクと家族4人で羽田空港に向かいました。空港には幟を持ったお弟子さんはじめたくさんの方が見送りに来てくださっていて、おおいに感激した父は機内で涙したそうです。1ドルが360円だった時代、決してお金に余裕はありませんでしたが、各方面での数多くの人脈がまさに父の財産であり、一番の宝物でした。

父の人生に与えた最大の影響が戦争と広島での被爆であったことは間違いありません。以下は父本人が2011年（当時87歳）に東京藝術大学の同窓会誌に寄稿した被爆

についての原稿を改変したものです。少し長くなりますが引用させていただくことで、父自身の言葉で皆様に父の気持ちをお伝えし、高齢の母妙子に代わりまして我々兄弟からのご挨拶とさせていただきます。

本冊子の最後に父の作品リストを載せております。皆様の心の中にいつまでも父の作品が鳴り響き続けることを家族一同願っております。

本日は本当にありがとうございました。

2019年2月24日 川崎優献花式にて

長男 川崎雅司

次男 川崎雅哉

平和への思い ――困難を乗り越えて――

川崎 優

私は昭和18年4月に東京音楽学校に入学しフルートを専攻したが、演奏家と同時に作曲家を目指していたので音楽学校入学と同時に諸井三郎先生に師事して作曲法を学んだ。そして戦後も中野の先生宅に通い和声、対位法、アナリーゼなどの指導を受けた。バロックから現代まで、12音技法まで学んだが、シェーンベルク、ベルク、ウェーベルンなどの作品のアナリーゼも含まれていた。

昭和31年（1956年）に第11回文部省主催芸術祭で作曲賞を受賞して作曲家として認められ、また幸運なことにユネスコの創作芸術家のためのフェローシップを受領して、作曲研究者としてジュリアード音楽院でパーシケッティ教授のもとで指導を受けた。

私は作曲家として戦後30年もの間2つの理由で原爆をテーマにした曲を書くことができなかった。ひとつには、自分が被爆者であることを売り物にしたくなかったからである。何故かと云えば被爆者が作曲したとなればマスコミが寄ってきて有名になるかも知れない。それが嫌だった。もうひとつは、被爆者に対して永い間差別と偏見があったからである。また政治的意図が入ってきたり、特定の社会運動が介入してきたりして、被爆者は嫌な思いをさせられたのだ。例えば被爆者は就職もままならず、結婚も躊躇されて社会から遠のかれることが多かった。幸い私は学園復帰も音楽家としての仕事も、また結婚も出来たが当時は被爆者に対して多くの偏見があったのだ。

しかし私は第二次大戦が終わって30年目の昭和50年（1975年）に広島市で毎年8月6日に行われる平和祈念式典で演奏される祈りの曲第1「哀悼歌」を広島市に献呈した。この曲は毎年の平和祈念式典の献花が行われるときに演奏さ

れるのだが、原爆投下時の8時15分に終わるように演奏される慣わしになっている。実は広島在住の音校の先輩である増広氏に原爆をテーマにした曲を作曲してはどうかと云われたが、前述のように私は作曲を躊躇していたが、思い改めてこの作品を広島市に献呈するのに10年以上が過ぎていた。

「慎みてこの曲を原爆の犠牲となられた方々に捧げます。30年という年月が過ぎましたが原爆被爆の体験を決して忘れることはありません。あの日私は紙一重の運命の差で生きながえる事が出来ましたが、無残な死を遂げられた被爆者の方々にこの祈りの曲を捧げ御霊の安らかならんことをお祈りさせて頂きたく思います」

これが“祈りの曲第1「哀悼歌」”を広島市に献呈したときに楽譜に書き添えた言葉だ。

曲は情景描写ではなく、亡くなられた被爆者に捧げる慰めと、また私の憤りを表したもので、暗くて重厚で“演奏していて悲しくなる”とはこの曲を演奏していた高校生の言葉だ。そして私の意志とは裏腹に祈りの曲に対して多くのマスコミからの取材があった。そのとき私は祈りの曲の連作をライフワークとして約束し今までに6曲作曲した。第1、第2、第3、は吹奏楽曲で昨年86才のときに第5に続いて祈りの曲第6「夕べの祈り」を広島で初演し、只今第7を模索中だ。

ところで私の祖母は永井建子（ながいけんし、フランスに国費留学し、帰国後陸軍軍楽隊長に就任、軍楽隊創成期に極めて重要な役割を果たした）の妹で、私の父川崎豊（かわさきゆたか）は、伯父永井建子が隊長である陸軍戸山学校に入隊したが、もともと声楽家志望であったので除隊後、テノール歌手として浅草オペラに所属し、田谷力三やエノケンの名で勇名を馳せた榎本健一などと一緒に活躍していた。非常に身体が大きく男前であった。私の妻の父は私の父のことを「三船敏郎」に似ていると言っていた。また声が大きく自宅で発声練習したり歌を歌ったりしたので近所で迷惑がられて何回

も引越しを余儀なくされた。その為に私は小学校を6回も転校している。

父川崎豊はドラマチックテノールでトスカやパリアッチ、そしてマダムバタフライのピンカートンなどを歌っていた。だらかな人でイタリアのミラノに声楽の勉強に行った。帰国後は三浦環と組んでお蝶婦人のピンカートンを演じたり、コロンビアレコードの専属歌手として吹き込んだレコードが今も残っている。またファシスト党の党歌をJOAKから全国放送したこともあった。父がイタリアに行っていた2～3年間、私は母と二人で父の故郷広島で父の帰りを待っていた。

父は伯父の永井建子のお宅に下宿していたことがあった。軍人の家庭の雰囲気の中で生活した影響なのか、芸能的な歌の世界を嫌い晩年は多くのお弟子を育て、96才の長寿をまっとうした。

私は大正13年（1924年）4月に東京で生まれた。浅草の富士小学校に入学したが間もなく父がイタリアに声楽の勉強に行ったので母と一緒に広島の祖父母の家で暮らすことになった。その時に母からピアノのレッスンを受けた。父が帰国すると我々一家は東京に移った。そして私は昭和初期の日本の平和な時代を楽しく過ごした。しかしやがて満州事変、支那事変と日本は軍国時代に突入し、クラシック音楽家は仕事がやり難くなり、父は満鉄（国策会社南満州鉄道）の厚生課で音楽指導をすることになり両親は満州の奉天に行った。

私は広島に残り親戚の家から広島二中に通っていたが、青年憧れの地、旅順の旧制高校への進学を希望していた。この高校には在満の中学生は優先入学が出来ると知って中学5年生のとき両親がいる奉天二中に転校した（当時旧制中学校は5年制であった）。奉天の生活は大陸的で悠然としていて楽しかった。美しい夕日の強烈な印象は今でもおぼえている。私は軍の払い下げの馬に乗って満人街をあとにして秦の始皇帝の廟のある公園で乗馬を楽しんだ。それまでは旧制高校か

ら理科系の大学を受験しようとしていたが、日本内地では見られないような悠然とした北満の情景に魅せられて、私の胸に秘められていた“音楽”がムックと首をもたげてきた。「作曲家になりたい」と父に懇願した。

父いわく、「私の音楽経験から思うに作曲家になりたいのなら先ず演奏の機微を知らなくてはならない。しかしお前はピアノ科は間に合わない、声の質も声楽家向きではない。したがって今から間に合う管楽器を専攻するとよい」と言ってフルート、オーボエ、クラリネットなどを持ってきてくれたが、さっとらくに音が出てくれたフルートがその後の私の最愛の友となった。

昭和17年3月に奉天二中を卒業した私は上京して鈴木正三先生に師事し東京音楽学校を受けたが当然の事ながら不合格、次年度に再挑戦して合格した。このとき実技試験でモーツァルトのフルート協奏曲2番を吹いた。どんなふうに演奏したか覚えていないが多分めちゃくちゃだったと思う。しかしコーリューブンゲンは全部暗譜していたし、ピアノや聴音の試験はなんの苦もなく無事合格、しかし最後の面接のときに乗杉校長から「お前は日本人か」と問われ、私は大きな声で「ハイ！日本人であります」と答えたが、「この国語の成績はなんだ！」と叱られたが無事に入学させてくれた。乗杉校長は東京帝国大学文科哲学科出身だった。

当時音楽学校は1年間は仮入学でまず成績、そして次に素行調査がありこれに問題なければ本入学となる。したがって私は昭和19年4月に晴れて音校2年生となった。さて、我々が本入学になって間もなく校内の掲示板に張り紙が出された。

「陸軍戸山学校軍楽隊の軍学生として入隊を希望する学生は申し出ること。申し出た者には便宜を与える」とある。張り紙は乗杉校長名であった。後で判ったことだが、その便宜とは、戸山学校に入れば一般の兵科としての入隊を免れることであった。

私は同窓の芥川也寸志、奥村一、斉藤高順、團伊玖磨らと一緒に戸山学校入隊を希望した。ところが戸山学校は志願兵の為の身体検査を受けなければならないのだが、私は酷い近視でその為だけで落とされてしまった。やむなく私は一般の徴兵検査を受けることになったが、近視のために甲種ではなく第1乙合格の現役兵として昭和19年の9月に広島第2部隊に入隊することになった。

入隊が近付いたある日私は乗杉校長に入隊の挨拶に行ったが、帰りに上野公園を駅に向かって歩いていると警戒警報のサイレンが鳴った。警戒警報が鳴ったときに生徒は学校に駆けつけて学校を守ることになっていたので私は急遽学校へ引き返した。「お～丁度良いときに来た」と校長が学校訪問中の榎藤恕陸軍中將に会わせてくれた。そしてこの会合が戦時中の私の運命をさまざまに翻弄したのだ。榎藤中將は陸軍船舶部隊に音楽学校の生徒をよこして頂きたいと要請に来たのだった。

このようないきさつの後に間もなく私は広島第2部隊に入隊した。入隊前に自分の特技についての調査があり、私は中学生のころに乗馬の経験があり、また音校生であったので特技は音楽と乗馬と申告した。実は音楽の耳を認めてくれて通信兵になることをひそかに望んでいたのだ。しかし馬に慣れていることを取り上げられて馬を引いて荷物を運ぶ輜重兵になったのだ。

さて入隊後の兵営内ではあまりにも残虐な仕打ちを受けることになったが、とにかく何が何でも殴られたのだ。「眼鏡をとれ、股を開け、歯を食いしばれ！」グワーンと鉄拳がくる、何度もくる！しかし怖いのは1週間ぐらいでその後は殴られても怖くないが頬の腫れはおさまらない。それと具体的には書かないが精神的な虐待が堪えられないのだ。（こうした軍規軍律とは関係ない虐待は戦争末期の軍隊崩壊の前触れだったのだろうか？と今思う。）

入隊後1ヶ月ぐらい過ぎたある日、広島駅から汽車に乗せられていくへ行くとも知らされず、汽車は西に向かった。兵隊の輸送を秘密にするためか窓には鎧戸が降ろされ、外の様子はわからなかったが着いたところは下関だった。そこからさらに連絡船に乗り釜山へ、再び汽車に乗りソウルまで行ったがここから汽車は右方向に進み朝鮮半島の右端のソビエト国境に面した琿春にやっとたどり着いた。広漠とした琿春の部隊で私は馬の世話をし、厳しい訓練をしていたが突然本部に呼び出されて広島の陸軍船舶部隊に転属するように命令された。同年兵の複雑な眼差しに送られて、私は来たときの鉄路を一人で引き返し、懐かしき広島に帰ったのだ。陸軍の船舶部隊の中樞は広島にあったが、私はすぐに軍が接收した兵庫県西宮の甲陽中学内の部隊に転属した。

私が所属したこの船舶部隊は秘密部隊であった為に兵隊の外出は禁止され、運動は監視の上官とともに郊外を駆け足で走りながらモンペ姿の女性に目を馳せ、悲しき男性のさかを思いしらされた。しばらくしての事だったがピアノ科の教授井口基成先生も軍属としてこの部隊に所属していたと聞いたが会ったことはなかった。

実は昭和17年8月7日に日本軍がソロモン諸島のガダルカナル島を占領したときにアメリカ軍が置き忘れたレーダーがあった。それを接收して東芝で入念に構造を調べて日本製レーダーを作ったのだ（今ではレーダーは珍しいものではないが当時アメリカが初めてレーダーを開発していた）。日本で開発したレーダーを“ス号”と言ったが、その仕掛けはレーダーから水中音波を出してもものに当たった反射音をキャッチし、その反射音の時間経過と方角をブラウン管上に示すのだが、この反射音が岩に当たったものか、漁船か、敵の潜水艦に中ったものかを耳に当てたレシーバーで聞き分けるのだ。そこで優れた聴覚をもった音楽学校の生徒が注目されたのだが、私は少年兵対象の音感教育将校要員として徴用され訓練されたのだ。

日本は昭和19年までにアメリカの潜水艦によって大小の戦艦特に輸送船など1009隻を失っているのです。レーダーの開発が急務であった。実はレーダーの製造が間に合わず、海上に出てス号で訓練したのは2～3回のみで、後は隊内でベニヤ板に取り付けられた模型のスイッチを“スッチかかれ～”の号令で“はい！”と応答して模型のスッチを廻すのだが、今考えるとなんとも滑稽で哀れなことだ。

さて音感教育将校を目指す私は先ず戦陣訓を覚えたり、レーダーの仕組み、器械の操作など、およそ音楽とは関係ないこれらについて勉強した。私達幹部候補生は9時の消灯の後にも士官室で12時まで勉強して就寝したが、夜明け前3～4時頃に非常呼集だ！と起こされて一斉に整列、点呼、1、2、3、と大声で叫ぶのだが、ボヤボヤしているとすぐ鉄拳のお見舞い、さらに足蹴の制裁を受けるのだ！

続く猛訓練のためか定期的な身体検査で血沈が物凄く下がり、検査の結果右肺浸潤と診断された。絶望した私はなすすべもなく、涙もなく、ただ呆然として下士官に伴われて姫路城、別名“美しい白鷺城”のもとにある陸軍病院入院となった（今でも車窓からお城を見ると遠い昔を思い涙ぐむ）。入院後やや快方に向かった私は、陸軍が接収している日本海岸に面した城崎（きのさき）の温泉宿で療養することになった。ここでの2ヶ月に及ぶ療養中に私は唯一持つことを許され部隊の移動中も持ち続けた諸井三郎著『機能と声』を紐解き夢中で読みふけたのだ。（戦死するまで生きる証として勉強しよう）とこれは私だけでなくすべての学徒兵の叫びではなかったろうか？ 微熱も治まり快方に向かった私は1ヶ月の帰郷療養休暇をもらい広島叔母の家で休養することになった（奉天在住の両親のもとへの帰宅は許されなかった）。

昭和20年8月6日、この運命の日、私は早朝に起きて広島駅に向かった。江田島の海軍兵学校にいる従弟の海軍兵学校生徒、湊義秋君に会うためである。彼とはこれが最後の面接と思った。ところが今では考えられない事だが、駅に着い

てみると乗車券発売制限で手にはいらず、随分ねばったがあきらめて市電に乗って家にむかった。このとき私の乗った電車は爆心地を通ったが、それは悲劇の30分位前のことであつた。帰宅した私は叔母に先ほどのいきさつなどを話していたが、そのときピカッと一面を明るくした閃光と同時に“パン”という軽いようなしかし鋭い爆音が轟いた。このとき原子爆弾は広島市街の580メートル上空で炸裂し、一瞬にして広島市街の半径2キロ以内が壊滅した。私が被爆した家は西観音町1丁目で、爆心から1.5キロのところであつた。家は瞬時に崩壊し中にいた私と叔母と従妹の3人は壊れた材木の下敷きになり私は気絶して下敷きのまま、5分なのか10分なのか知るよしもないが、ハッと我に返り材木を掻き分けて思わず、助けてくれ～～、助けてくれ～～と絶叫したのだ。しかし私は気を取り戻してその場に仁王だちになりシャツを脱いでそれを首に巻きつけて左耳下の裂傷からの出血を止めたのだ。やがて一緒にいた叔母と従妹も這い出てきたが、私は大量の出血で朦朧となりその場に倒れてしまった。しかし幸いなことに近くに居合わせた屈強な男が私を背負ってすぐ近くの川岸まで運んでくれたが、後日その人は韓国系の人ではないかといわれた。

そのうちに怪我を免れた叔母と従妹が壊れた家の廃材を集めて狭い小屋のようなものを作ってくれて私をその中に入れてくれたので、間もなく“ザーア～”と降り注いだ放射能をおびた魔の黒い雨から免れることができたのだ。その時この雨を避けて見知らぬ被爆者が小屋に入ってきて「私は何丁目のだれだれです！どうか私がここにいることを連絡してください」と、まだまだ被爆者達は原爆の凄惨さを理解できていなかったのだ。やがてあたりは猛火に包まれ市街は死の町と化していったのだ。

広島市街は太田川を源流として七つの川に分かれているデルタ地帯だが、市の西の方面の福島川に唯一無事であつた橋を渡って叔母が妹の、つまり私のもう一人の叔母の所にかけ

こんで「優をたすけて～」と援助を頼んだのだ。すぐに叔母は近くにあった大八車を引っ張ってきて私を乗せて広島市の西側にある己斐駅の近くまで運んでくれたのだ。その移動中に叔母は私が気を失いそうになるとあちこちを強くつねって「しっかりして！」と何度も私の耳もとで叫んだそうだ。

そんな中でも私は訓練中に教えられた「大怪我をした時には水を飲むな」と言う事を思い出した。私はこの移送中に喉がからからに渴いているのに我慢して水を飲まなかったのだ。大量に出血しているときに水を飲むと血液が薄くなってどんどん出て行ってしまい、さらにまた喉が渴くのだ。私の口の中は渴ききって声も出なかった。しかし叔母が懸命に大八車を引っ張って行ってくれたので私は何とか無事に己斐駅近くの広場に運ばれたのだ。そしてそこにはバスが待機していて怪我人を乗せようと待っていた。歩ける怪我人は次々とバスに乗っていったが、歩けない私は無視されていた。助かる可能性がある人を救助し、可能性の少ない者は無視することはパニックにおける鉄則だ。私をここまで運んでくれた叔母は懸命に「この人は兵隊だからバスに乗せなさい」と叫び、その声がとどいたのか、有り難いことに座ることの出来ない私はバスの中の床に運びこまれたのだ。後日わかった事だがこのとき私を助けてくれたのは大野浦駐屯隊のバスだった。

バスは厳島対岸の大野浦まで行き私達は近隣の小学校に収容されて何故か校舎ではなく校庭に寝かされた。翌朝夏の炎天下、屋外に寝せられて傷の手当てが始まったが、その手当てはまさに地獄の苦しみだった。麻酔なしで耳下の傷を消毒されたがその苦しいこと～～焼け火箸を突っ込まれたような極度の苦痛でショック死寸前の苦しみだ。それから傷の縫合だが、軍医が慌てて糸のみならず針を折るしまつ、「待ってろ」と暫くして、ああまた焼け火箸、隣の衛生兵の声「ああ駄目だ腸を遣られる」と、まさに地獄絵そのものだ。

このような言語に絶する苦しみを受けたのだが、なんと原爆の呪いよ！被爆者は放射線を浴びたために白血球が破壊さ

れて傷口が化膿し、あの極度の苦しみで縫合した糸をすべて切り落とし醜い傷口をさらけ出したのだ。そして後々まで私は所謂“原爆ケロイド”に苦しめられなければならなかったのだ。

痛さにもようやく慣れてきた頃に私はソ連の参戦を聞いて奉天の両親のご無事をお祈りした。そしてその頃どこかのお婆さんが傷病の介抱に来てくれた。「まあ～～どこのどなたか知りませんが私の息子もあなたのような兵隊ですよ」と言いながら、ドロドロのお粥を木のお匙で私の口に涙を流しながら流し込んでくれた。ここで暫く療養しているとき従弟の土井君が何処で借りて来たのか木炭車で私を彼の家に運んでくれた。土井君はまだ高校生だったがその家は広島県北部の八幡村の農家だった。私はその家の納屋に寝かされていたが、身体を休めて療養するには充分だった。

昭和18年（1943年）の始め頃からアメリカは巨費を投じて原子爆弾の開発に着手、昭和20年7月16日ついに成功したが、広島市に爆弾が落とされる20日前のことである。原爆を搭載したB29の操縦士ポール・テイベッツ機長（当時30才）は爆撃機の名操縦士としての誉れが高く、ヨーロッパ戦線から引き抜かれてテニアン島に来ていた。機名はエノラ・ゲイといったが、これは彼の母の名前だった。エノラ・ゲイが進発したテニアン島は太平洋西部のマリアナ諸島のひとつで、昭和19年8月3日に日本軍と激戦の末アメリカはこの島を占領した。これより先7月18日にテニアン島の西30キロのサイパン島も占領されて両島にあった日本軍の飛行場はアメリカ軍によって整備された。そして両飛行場から日本の本土を空襲し以後10ヶ月の間に日本の主な都市は焦土と化した。

さて中国地方の雄都広島には明治時代に鎮台が置かれて軍港宇品港には軍用船の出入りも多く、軍都として重要な位置を占めていた。従って空襲に対する備えも良く空襲による被害はあまり受けていなかった。アメリカは原子爆弾製造に成

功すると間もなくサンフランシスコから大型巡洋艦インディアナポリスで爆弾をテニアン島に運んだ。そして8月5日エノラ・ゲイに搭載して同機は翌6日午前2時25分に発進した。広島上空に達したエノラ・ゲイは8時15分30秒に9600メートルの高度から原子爆弾を投下した。爆心地は原爆ドームから南東約150メートルの地点と推定されている。原爆は炸裂と同時に、空中に直径約100メートルの火球が発生し、その火球の中心部の熱度は30万度で爆心直下では6000度の照射を受けた。そして半径2キロメートル内の木造家屋は全て倒壊し熱線で火がつき大火災となった。原爆ドームのようなコンクリートの建物は残ったものもあったが、しかし窓は吹き飛ばされて内部は焼失した。

原子爆弾の破壊力は爆風と爆圧、そして熱線の複合威力によるが、一方目に見えない放射線が人を殺傷した。また被爆した物質は放射能を帯び、以後長期に渡って放射線（アルファ・ベータ・ガンマ線などの粒子線）を出し、脱毛、高熱、嘔吐、吐血、下血、血尿などの障害を起こした。

また原爆炸裂と同時に巨大なキノコ雲が発生しキノコの莖の部分も見える見る膨張して大きな柱となり、北西（内陸）に向けて移動した。やがて市の北部、西部では土砂降りの雨となった。豪雨は2時間から3時間降り続いたが、最初の1時間位の間雨は黒かった。この黒い雨は炸裂したさい黒煙となって上昇した泥塵と火災による煤塵によるもので、強い放射能を帯びていた。従って雨を浴びた人は、直接被爆した人と同様の症状にかかった。また雨水が流入した川の、ナマズ、ウナギ、池の鯉などの魚類は全て死んで浮き上がった。雨降りの間は気温が下がり真夏にもかかわらず薄着の人は寒さにふるえた。

この年の末までに広島市では14万人が死亡した。

親戚の農家ではとても親切に私の面倒をみてくれた。薬もなく手当の仕様もなかったが、ある日私をタンカに乗せて

近くの医院に連れていってくれたが、そこでは赤インクのような皮下注射しか無かった。医者には親戚の叔母がお金ではなく米や野菜などをお礼に持っていった。「お灸が良いよ」との風評が伝えられたが、これが効いたのか私は日に日に快方にむかった。足の先から頭の天辺まで連日のように沢山のお灸をすえてもらったが有り難いことにそれは手伝いに来ていた私の従妹だった。お灸が白血球を増やすことは以前から周知のことだったのだ！

戦争も終わり私はすっかり元気になったのでお世話になった方にお礼を言い、「東京へ行きたい」と私を一番可愛がってくれる祖母に言ったところ「マサルよ、広島にいなさい、もう此处を離れないで～」と懇願された。しかし私は「おばあさんごめんなさい」と胸の内で謝りながら支給された国鉄の自由切符を持って西宮の終戦処理室に行った。「ご苦労！」と、もと将官だった人に私の部隊名など告げて身分を明かし、やっと私は日本人としての身分証明書もらったのだ。敗戦の悲しさ、軍隊崩壊後その日まで私は身分を認められていなかったのだ。

そしてここで支給された軍服と毛布1枚だけの私の全財産を抱えて、私は東京の叔父のもとに転がり込んだ。それは昭和20年10月中頃だった！二度と帰ることは出来まいと思った懐かしの我が母校に行ったとき皆が「お化けが来たあ～」と言いながら温かい歓迎をしてくれた。学校は私を3年生に進級させ昭和22年3月に卒業した。いや、4年分を約2年ほどの勉強で卒業させられたのだ（お国のために命を賭けて奉仕したのに～）。でも贅沢は言うまい、私はあの大战から奇跡的に死を免れたのだ。

卒業した私は不足した勉強を取り戻そうと研究科に入った。すると教務から研究科在籍のままオーケストラ要員となり、傍ら非常勤講師として学生を指導してくれといわれた。私はそれ以降軍隊の2年とアメリカ留学の1年を含めて49年間芸大非常勤講師を務めた。途中で本官にという話もあつ

たが、フルート科の指導の他、作曲家としての活動もしたく二兎を追う楽しい音楽家となった。

私は31才のときに妻妙子と結婚した。妙子は音楽学校の3年後輩でヴァイオリンを専攻していた。私は戦後の在学中は左耳下の原爆ケロイドの治療のためにいつも首に包帯を巻いていた。それを見て後輩の小出妙子は「可哀想な人」と思っていたそうだ。そしてそのケロイドの手術はとても危険だからと言われてずっと我慢していたが、今から7年前の戦後60年目に築地の聖路加病院の整形外科の名医によって摘出に成功した。被爆したときにこの傷口に飛び散ったガラスの破片が入り込んだ為か、戦後ながいこと左耳タブから小粒のガラスの破片が次々に出てきたが、友人は「ほっ、ダイヤが出たぞ～」と明るく私の心を癒してくれた。

さて只今私を合わせた家族10人は、人並みの充実した生活をエンジョイしています。それに私は多くの、教え子と言うにはあまりにも立派な人材に恵まれています。また作曲家としてはソナタ、合唱曲、マーチなど三桁の作品を残しています。そして最近の大変嬉しいことは今年2011年9月6日にプラハのワルトシュタイン宮殿ホールで、私の作品の頂点とも思われる“弦楽四重奏曲プリモ”が初演されることです。

原爆被爆、阿鼻叫喚の地獄絵、こんなつらい苦しいことはお話ししたくないのですが、これが反戦、平和への渴望に役立てばとの私の願いです。

(2011年記す)

川崎優 作品リスト（作曲年、演奏時間、出版社）

フルート曲

- フルートソナタ第一番 1958 16:00 アカデミア出版
 - 第一楽章 Andante energia
 - 第二楽章 Allegro giocoso
 - 第三楽章 Adagio sonoro
- フルートソナタ第二番 1961 11:20 アカデミア出版
 - Adagio - Allegro - Presto - Andante (Trio) - Presto - Adagio
- ある日の随想 1963 4:40 Carl Fisher
- フルートのための二章 1973 日本近代音楽館
 - 第一楽章 Andantino 4:00
 - 第二楽章 Lento 4:20
- わらべうたを主題にした変奏曲 1975 26:00 共同音楽出版社
 - 柴の折戸・ずいずいずっころばし・ゆうやけ・
 - うさぎうさぎ・むすんで開いて・一夜明ければ・
 - 通りゃんせ・かり
- うた Vocalize-Japanesque 1985 2:30 共同音楽出版社
- 12音技法による2つのフルートのための小品集 1988 6:40 日本近代音楽館
- 涙 La Lagrima 1990 8:30 日本近代音楽館
- 夜の静寂に 1992 9:40 日本近代音楽館
- 彼はフルートに接吻をした 1994 9:35 日本近代音楽館
- ファンタスティック・コンポジション 1995 10:25 日本近代音楽館
- 3つの叙情的小品 1995 日本近代音楽館
 - ララバイ 3:50
 - アリア 3:30
 - セレナーデ 3:30
- リズムへの誘い 1996 8:45 日本近代音楽館
- オムニバス 2003 7:30 アルソ出版
 - 日本の香り・忘れな草・常動曲
- 夢想 2004 6:00 アルソ出版
- あこがれ 2005 6:00 アルソ出版
- 祈りの曲 第4「祈り」 2006 7:00 日本近代音楽館
- 祈りの曲 第5「暁の祈り」 2007 6:40 日本近代音楽館

- 祈りの曲 第6「タベの祈り」 2008 7:10 日本近代音楽館
- 祈りの曲 第7「いく星霜すぎるとも」 2012 6:30 日本近代音楽館

フルートオーケストラ・フルートクワイヤ曲

- クリスタル 1984 14:00 日本近代音楽館
- ロマンチック・エピソード 1986 8:00 日本近代音楽館
- マーチ・キューピッド 1987 3:30 日本近代音楽館
- 花物語 1992 16:00 日本近代音楽館
 - クロッカス・わすれなぐさ・
 - スイートピー・ひまわり
- ギリシャ神話による2つの小品 1993 20:00 日本近代音楽館
 - オリオンが追いかけた七人の娘
 - 女神の涙から生まれた花
- 雪おんな 1994 9:50 日本近代音楽館
- 不死鳥 1995 7:00 日本近代音楽館
- 恋人たちに 1996 8:20 日本近代音楽館
- ピノキオ 1997 10:00 日本近代音楽館
- チェレスタ讃歌 1998 14:00 日本近代音楽館
- デジタルピアノ 2000 16:00 日本近代音楽館
 - (a) マエストロ ホアキン・ロドリーゴを偲び
 - ハープシコードによせて
 - (b) 鐘と歌
- ロマンズ 2004 13:00 日本近代音楽館

吹奏楽曲

- 行進曲「希望」 1963 3:00 音楽之友社
- 行進曲「平和の前進」 1966 3:00 Carl Fisher
- 万博マーチ「進歩と調和」 1970 4:00 音楽之友社
- WARABE-UTA for Symphonic Band 1966 6:00 Belwin Mills
- ふるさとの情景 1969 6:40 音楽之友社
- 民謡風の主題による 1973 9:30 音楽之友社
 - 吹奏楽のための幻想曲
- 吹奏楽のための組曲 1973 18:00 Scherzando
- わらべうたを主題にした 3つの小さな幻想曲 1974 11:30
- 祈りの曲 第1「哀悼歌」 1975 8:00 広島市役所

- | | | | |
|------------------------------|------|-------|--------------------------|
| • 吹奏楽のための「詩曲」 | 1976 | 8:00 | Molenaar |
| • 祈りの曲 第2「悲歌」 | 1977 | 12:40 | 佼成出版社 |
| • 祭りの曲 | 1978 | 6:50 | |
| • ロマンチック・エピソード | 1979 | 8:00 | |
| • トランペット独奏と
吹奏楽のための「ロマンス」 | 1982 | 13:30 | 日本近代音楽館 |
| • キューピッドのマーチ | 1983 | 3:30 | Fritz Schulz
Freiburg |
| • 祈りの曲 第3「広島詩」 | 1986 | 10:00 | アカデミア出版 |
| • おとぎの国のおじいさん | 1989 | 10:40 | |

管弦楽曲

- | | | | |
|-----------------|------|-------|---------|
| • オーケストラのための組曲 | 1955 | 25:00 | 日本近代音楽館 |
| • 組曲わらべうた（合唱付） | 1956 | 25:30 | 日本近代音楽館 |
| 第一楽章 一夜明ければ | | | |
| 第二楽章 翁とおうな | | | |
| 第三楽章 通りゃんせ | | | |
| • 日本民謡を素材とする交響曲 | 1957 | 34:00 | 日本近代音楽館 |
| • 祈りの曲 第1「哀悼歌」 | 1997 | 8:00 | 日本近代音楽館 |
| • ピッコロ コンチェルト | 2010 | 12:00 | 日本近代音楽館 |

弦楽曲

- | | | | |
|-----------------------------|------|-------|---------|
| • 弦楽四重奏曲 第一 | 1965 | 20:00 | 日本近代音楽館 |
| 第一楽章 Allegro | | | |
| 第二楽章 Adagio ma non troppo | | | |
| • こどもの歌 | 1969 | | 日本近代音楽館 |
| （日本的旋律による主題と変奏） | | | |
| • かわいいヴァイオリニスト | 1998 | 20:00 | 共同音楽出版社 |
| 虫のレクイエム・かわいいヴァイオリニスト・ | | | |
| わたしの夢・ヴァージニアのこうもり・おもいで・ | | | |
| あこがれ・オスティナート・田園・通りゃんせ・柴の折戸 | | | |
| • 弦楽三重奏曲 La Improvvisazione | 2004 | 10:30 | 日本近代音楽館 |
| • 祈りの曲 第4「祈り」 | 2006 | 6:50 | 日本近代音楽館 |

合唱曲・歌曲

- 混声合唱曲「海」 1956 24:30 カワイ楽譜
- 無言歌（新しい日本の歌 第1集） 1966 3:10 音楽之友社
- たんぽぽ（新しい日本の歌 第3集） 1968 3:30 音楽之友社
- 合唱組曲「心のうたごえ」（女性合唱） 1973 14:00 音楽之友社
 帰り道・ママは私の太陽・
 百舌鳥の鳴く日・古里は伊豆の小島
- 梢（新しい日本の歌 第8集） 1973 3:30 音楽之友社
- 海洋博賛歌 1975 5:00
- 日本の桜 1977 2:00
- 虹の帯 2000 3:10
- ママの立ち話 2000 2:00
- 紀伊の山 2001 日本近代音楽館
- 君を慕いて 2006 4:00
- パパの子守うた 2006 3:00
- のんびりくらげ
- 風となかよし

オペラ

- 「鷹の泉」 1957 50:00 音楽之友社

バス・クラリネット曲

- バラード 2007 日本近代音楽館
 Ballad -Atmosphere Japanese
 Dedicated to Professor Henri Bok

ピアノ曲

- カンタービレ 1984 3:00 音楽之友社
- カナダのガチョウ 2001 2:00
- ミ、ド、ソ、の遊び 2001 2:00
- くつろぎのピアノ 2006 アルソ出版
 小人のワルツ・晩秋のうた・人形の夢・かわいい恋人・
 灯ともし頃・砂漠の隊商・おじいさんのお話し・
 いたずら子猫・カンタービレ・森のこうもり・
 あこがれ・優しいおはなし

校歌

• 亀戸中学校	1957	日本近代音楽館
• 広陵高等学校	1958	日本近代音楽館
• 宮島中学校	1958	日本近代音楽館
• 松浪中学校	1964	日本近代音楽館
• 川根高等学校	1975	日本近代音楽館
• 常葉大学附属菊川中・高等学校	1977	日本近代音楽館
• 菊川東中学校	1978	日本近代音楽館
• 川越東高等学校	1985	日本近代音楽館

作／編曲集

• フルート名曲アルバム Vol. 1 川崎優編	1971	共同音楽出版社
• フルートによるわらべうた 川崎優編	1975	共同音楽出版社
• フルート名曲アルバム 川崎優編	1979	音楽之友社
• フルート名曲アルバム Vol. 2 川崎優編	1982	共同音楽出版社
• たのしい 11 のフルート名曲集 川崎優編著	1987	共同音楽出版社
• すてきなフルートコンサート 川崎優編著	1996	共同音楽出版社
• すてきなフルート 3 重奏 川崎優編著	1996	共同音楽出版社
• かわいいヴァイオリニスト 川崎優・川崎妙子著	1998	共同音楽出版社
• かわいいオカリーナ合奏曲 Vol. 1 川崎優編曲・監修	2000	アルソ出版
• かわいいオカリーナ合奏曲 Vol. 2	2002	アルソ出版
• フルート名曲集セレナーデ編 川崎優編 川崎優編曲・監修	2002	アルソ出版
• フルート名曲集叙情編 川崎優編	2002	アルソ出版
• フルート名曲 300 選 Vol. 1 川崎優編曲・監修	2004	アルソ出版
• FLUTE PIECES VOL.1 川崎優編	2004	アルソ出版
• FLUTE PIECES VOL.2 川崎優編	2004	アルソ出版
• FLUTE PIECES VOL.3 川崎優編	2004	アルソ出版
• くつろぎのピアノ（1 2 のピアノピース） 川崎優編	2006	アルソ出版
• オカリーナで楽しむわらべうた変奏曲 川崎優編	2009	アルソ出版
• フルートで奏でるわらべうた 川崎優編	2010	アルソ出版

- かわいいオカリーナ合奏曲 Vol. 3 2010 アルソ出版
川崎優編曲・監修
- かわいいオカリーナ合奏曲 Vol. 4 2010 アルソ出版
川崎優編曲・監修
- かわいいオカリーナ合奏曲 Vol. 5 2010 アルソ出版
川崎優編曲・監修
- フルート名曲シリーズ288 2011 日本フルート
祈りの曲 No. 4～6 クラブ
- 楽しく吹けるフルート名曲30選 Vol. 2 2012 アルソ出版
川崎優編

＊ 昨年、明治学院大学図書館附属「遠山一行記念日本近代音楽館」
（略称日本近代音楽館）内に記念文庫「川崎優資料」を加えて
いただきました。現在絶版となっている楽譜および全ての直筆
譜を収めていただくよう、整理をお願いしております（近日中
に公開予定）。どうぞご利用ください。